

〔富岡鉄斎展によせて〕

## 富岡鉄斎筆「山莊風雨図」をめぐって



富岡鉄斎は天保七年(1836)に法衣商、十一屋伝兵衛の次男として、京都三条通新町に生まれました。近代に活躍した文人画家というイメージが強いのですが、青年期を過ごしたのは幕末の動乱期です。鉄斎は幼い頃、胎毒を患い、薬の副作用で聴覚に障害をもったと伝えられます。晩年には左耳は全く聞こえず、右耳は大声がやっと聞こえる程度でした。耳が不自由なこともあって、商売には向かず、学問を志します。鉄斎の学問は皇学、儒学、陽明学など幅広く、文久二年(1862)頃には、聖護院村の大田垣蓮月の旧居に私塾を開きました。鉄斎はやがて画家として大成しますが、生涯、本分は学者であると自負していました。実際に、慶応三年(1867)に出版された『平安人物志』には、儒家並びに詩の部に富岡鉄斎の名が上げられています。学者とはいえ、この時代には政治の流れと無関係ではいらませんでした。鉄斎も安政の大獄、天誅組の乱において多くの師友を無くしています。

「山莊風雨図」は賛文の年記から、八十五才となった大正九年(1920)八月に描かれた作品と分かります。鉄斎は前年に帝国美術院会員に任命され、この年は来年の大阪高島

(左)山莊風雨図 (下)同・賛



屋の個展に向けて盛んに制作していました。この作品には、雨の降る日に一人の人物が山莊の二階で読書する姿を描いています。晴れた日は外に出て耕作し、雨の日は家で読書する晴耕雨読の生活は、文人の理想と考えられています。この情景も確かに雨読ですが、絵の中に降る雨には、晴耕雨読という穏やかな言葉はふさわしくありません。まさに嵐です。山から吹き下ろす風雨に、樹木は激しく揺れ、山莊の周囲の竹藪は葉をちぎられて強く立っています。

風雨は幅の広い線描を重ねて表現しています。墨は柔らかく滲みながらも、混じり合わず、長く力強い線描は一本一本の輪郭を白く明瞭に示しています。この線描には、微妙に濃淡を付け、急角度で左上から右下に向かってまとめています。大きな力と非常に速いスピードを感じさせます。墨色は他の部分の墨と比べれば、わずかに青味を帯びています。この作品の彩色は山莊の円窓のある壁と人物の顔と手に塗られた代赭だけです。純白の紙と風雨の青味を帯びた墨色によって、明るい色彩感を与えます。人物の居る山莊の二階の部分を除き、全体の景観はこの風雨に霞んでいます。全てが動いている画面に人物の周囲だけ時間が止まっているようです。山や山莊は上から墨を塗り込めるように重ねて厚みを加え、特に、仕上げの濃墨は描写の要となる部分に施され、アクセントとなって画面を引締めています。山と竹藪では、濃墨で描かれた部分は強く浮き上がり、立体感の表現にもつながっています。この濃墨にも湿潤の変化が付けられています。水気の少ない濃墨はこすり付ける様に加えて、山莊の薬屋根の質感を出し、樹木や竹藪の動勢を強めています。まるで、激しい動きの残像のように見えます。

おそらく、この作品の主題はこれほどの嵐の日に平然と本を開き読書をする山莊の人物の心境にあるのでしょうか。鉄斎は画面の右上に賛文を次のように記しています。

「人間万事塞翁馬 推枕軒中聴雨眠」。これは中国の元時代の禅僧、熙晦機の「寄徑山虛谷陵和尚」と題する詩の一節です。「人間万事塞翁馬」は『淮南子』の「人間訓」にある北辺の要塞近くにいた翁の故事を踏まえています。ある日、翁の飼っていた馬が逃げ、数カ月後、胡の国の駿馬を連れて返ってきた。それから、この家は優れた馬に富む幸せに恵まれたが、そのために乗馬を好んだ息子は落馬し、足の骨を折る不幸に遭った。ところが、一年後に胡の国が要塞に攻め入った際に、足の不自由な息子は戦わずにすみ、近辺の多くの者が戦死したが、親子ともに生きながらえることができたという話です。この話には人間の禍福は変転し、計り知れないという教訓が込められています。賛文は「推枕軒中聴雨眠」と続きます。「推枕軒」は熙晦機の住んでいた室の名です。そうであるならば、部屋の中で雨の音でも聞きながら眠ってしようという意味です。「雨」の字に空から降る雨そのものを象ったような古体を用いているのは、画面の嵐をよく表わしています。

しかし、鉄斎は賛文をそのまま描いているわけではありません。画面の人物は賛文のように眠っておらず、心を静めて読書しています。そうであるならば、たとえ嵐でも学問をしようというのが絵の表現です。画中の人物は鉄斎自身であり、学問に志す強い意志がうかがえます。鉄斎は「鉄塞翁」という別号を持っていました。人間万事塞翁馬の故事には特別な関心があったと思われます。この作品では嵐が「塞翁馬」にあたります。嵐は恐ろしいが、そのおかげで訪れる人もなく読書が出来るということです。ところで、鉄斎にとって、最初に逃げた馬は何だったのでしょうか。おそらく聴覚ではなかったのでしょうか。そのために学問の道歩み、動乱をくぐり抜けることができたとも言えます。この作品のような絵画における力強い表現力も、この馬が連れてきたのかもしれない。(中野義隆)

季刊 美のたより No.125

平成10年11月13日

発行 大和文華館